

文中子考

——とくに東臯子を手がかりとして——

吉川 忠 夫

【要約】『論語』に模した文中子王通の『中説』にたいしては、その真偽をめぐって、従来さまざまの論評が加えられてきた。筆者は、王通の弟王績の『東臯子集』を手がかりとして、王通像の虚実をあきらかにし、また『中説』の真偽をさだめることにつとめた。『中説』が疑惑視される一つの、しかももっとも大きな理由は、唐初の名臣の多くが、王通の門人として『中説』に登場することである。しかし、陳叔達、温彦博、杜淹、魏徵たちは、門人とはよべないまでも、文中子学団と関係をもったと推定される。『中説』には、後人による仮託の部分のあることを否定しえないにせよ、このように『中説』にあらわされた王通像は、まったく放恣な作為の産物であるのではなく、少なからぬ真実がそこに反映されている、と考える。 史林 五三卷二号 一九七〇年三月

一

文中子考(吉川)

隋の大業の世にあらわれた文中子王通は、なんともわけのわからぬ人物である。彼は龍門で門弟を養ったが、古聖賢ののこしたテキストを教授するのではなく、みずから統経を制作して、それらを教授した。すなわち、「漢魏より晋代にいたるまでを討論し、その詔命を刪つて百篇とした」統書、「樂府を甄正し、その雅興をとつて三百篇とし

た」統詩、「晋の太熙元年より隋の開皇九年の平陳の歳に至るまでの行事を褒貶した」元経であり(楊炯、王子安集序)、そのほか、「易道に賛して先師の旨を申ばし、礼樂を正して後王の失ちを旌かにした」(『中説』、礼樂篇)。それだけではない。王通の言行録である『中説』は、結構といひ措辞といひ、あきらかに『論語』に模擬せんとするものであった。「彼は是非とも一個の孔子になりたいと思つたが、証拠がそろわないため、幾人かの人を修飾して堯舜湯武とし、

すべて自分のフィルターにかけたうえ、自分が聖人であることをあきらかにした。中説の一書は、そっくり孔子をまねようとするものだ。論語が、泰伯ハ三タビ天下ヲ以テ譲ル、といえ、陳思王ハ善ク譲ル、といい、魏相、論語が、殷ニ三仁有り、といえ、荀氏に二仁有り、という周公。また数人の公卿大夫をつかまえて問答し、当時の門人弟子になぞらえている。歐陽永叔は自分が韓退之愈になりたいため、ものだから僕を孟郊になぞらえるのだ、そう梅聖俞、龔臣がいったのとまったく同様に、王通は自分が孔夫子になりたくて、やみくもに他人をつかまえて聖賢にしたてている。「董常をもって顔回とするのは孔子をもってみずから任ずるものであり、^②諸公が輔相たりうるといふ類はすべて作りごとであり、^③また七制の君主、漢の高祖、文帝、武帝、宣帝、光武帝、明帝、章帝）を按配して彼の堯舜にしたてようとしている」（『朱子語類』卷二二七、戦国漢唐諸王）。

『中説』には、隋唐の際の錚錚たる人物が頻頻として登場し、しかもその幾人かは、王通の門人であるというのだ。王通についての評価は極端に分れている。その原因は、要するに、王通像をくみだてるうえの有力な材料となるべき

はずの『中説』が、仮託と粉飾過剰のためおおいに疑惑視されていること、さりとてそれにかわるにたる信ずべき伝記資料が欠如していること、に帰せられるであろう。『隋書』に王通が立伝されないのはもとよりのこと、そのなかに彼の姓名はひとつとして発見されはしない。そのため、王通の存在をあたまたまから否定してかかる論者すらいるありさまである。続経のうち今日に伝わるのはただ『元経』のみであるが、しかし『四庫提要』史部編年類には、注者たる宋の阮逸が、実はその本文をも偽作したもの、と断じている。司馬光が、「いま六経は皆な亡びぬ」（文中子補伝）と云うのを一例として、続経はすでに散亡し、伝わるのは『中説』のみとは、宋人のくりかえし説くところであるから、従うべき説であろう。いっぽう、『中説』についての『四庫提要』の解題は、子部儒家類にみえる。さまざまの論評の存するなかで、比較的平均的な王通像、と思われるものを示す意図をこめて、煩をいとわずさいしょに紹介しておきたい。

晁公武の『郡齋讀書志』卷二〇は、かつて以下の矛盾をあきらかにした。通は開皇四年（五八四）の生れであるから、李徳

林が開皇十一年(五九二)に死んだときには、八歳になったばかりである。しかるに、徳林が面会を申し入れて辞去すると、琴をひきよせて蕩之什をかきならし、門人たちはみな襟を濡らしたという記事がある王道。また、関朗は太和丁巳のとし(四七七)に北魏孝文帝に謁見しており、開皇四年(五八四)の通の生年まで、すでに一〇七年のへだたりがある。しかるに、朗に礼を問うたという記事がある魏相。また、薛道衡は仁寿二年(六〇二)に襄州総管に転出し、煬帝が即位してはじめて召還された。さらに『隋書』には、道衡の子の収は生れるとすく族父瑞のあとを嗣ぎ、成人してからも実父を知らなかった、とある。しかるに、仁寿四年(六〇四)、通は長安において道衡に会い、道衡がその子収に云云と語ったという記事がある天地、と。洪邁の『容齋隨筆』(統筆卷一、文中子門人)はまた、『唐書』には薛収が大業十三年(六一七)に唐に帰したとありながら、文中子世家は、江都事変(六一八)がおこったとき、通は病牀にあつたが、薛収をよんでともにかたつた、という矛盾をあきらかにしている。王応麟の『困学紀聞』巻一〇も、『唐会要』には、武徳元年(六一八)五月、はじめて隋の太興殿を太極殿とあらためたとありながら、『中説』世家に、隋の文帝が太極殿に召見したという記事のある矛盾をあきらかにしている。以上すべて史伝を証拠としており、矛盾

は明白である。

ところで、通は仁寿四年(六〇四)に長安より東のかた河汾にひきあげ、二度と長安に出ることはなかった。ゆえに世家にも、大業元年(六〇五)に一度徴召されながら至らなかつた、というのである。ところが周公篇には、先生は太業に遊び、竜舟五更の曲をきかれた、といい、阮逸は、太業は音楽庁、煬帝は江都に遊ばんとするにさいしてこの曲を制作した、と注し、『隋書』職官志には、太常寺に太業署が存在する、とある。すると通は、大業末年にもう一度長安に出かけたことになるが、これも仮託がためであることの一明証であろう。『楊炯集』の「王勃集序」に、祖父の通は隋の秀才高第。蜀郡の司戸書佐、蜀王の侍読、大業末年に引退し、龍門において経書を講じた、卒するや、門人たちは文中子と諡した、とのべている。炯はその孫のために序を書いているのだから、その祖父についての記事はきつと正確であろう。杜牧の『樊川集』巻首に、甥裴延翰の序があり、文中子曰ワク、文ヲ言イテ理ニ及バザレバ、王道ハ何ニ從ツテ興ランヤ、なる二句を引くのも、やはり今本と一致している。かく、いわゆる文中子なるものは実在の人物なのだ。またいわゆる『中説』なるものは、子の福郊と福時たちが遺言を纂述し、適当に虚飾をくわえたものだが、やはり実在の書なのだ。ただ唐朝開國

の初期にあたっていて明君大臣を虚名によって動かすことはできず、さらにまた陸徳明、孔穎達、賈公彦といった老先生や大家たちが館閣アガタにいならんでいて、空論によってごまかすこともできなかったので、人物著作のいずれもその当時にあらわれることはなかったし、また当時そのでたらめを指摘するものもなかったのである。中唐以後、ようやく時代が経過し証拠がなくなると、はじめてしだいにそのペテンが売りものにされはじめたまでである。宋咸が実在の人物ではないと断定し、^④洪邁がその著作は阮逸の撰述にかかると断定したのはゆきすぎであるとしても、学者のなかにとぎとして孔子顔回の道統をつぐものと結論するものがあるのは、見当ちがいはなはだしい。その歴然たる虚偽ぶりはとるにも足りないのだが、しかしさりとて大綱は要するにそれほど理にもとってはいない。また、聖人の言葉に模擬することは揚雄にはじまるが、まだその名を冒すまでにはいたらなかった。聖人の事跡に模擬することは通にはじまり、またその名をもあわせで僭称したのである。

王通にかんする専論として、われわれはすでに、平岡武夫教授の『経書の伝統』第一章「孔子復興と歴史叙述の形式——王通の統尚書——」をもっており、そこには、「漢を、

三代を、堯舜を、いわば、経書の時代を、夢み祈願する」王通の姿が、情熱的に語られている。しかしながら、『中説』に、後世の仮託や粉飾がかくも多いとするならば、王通を論ずるにあたって、その実像と虚像とをよりわけ作業が先行しなければならぬ、ということになるだろう。王通にたいする評価の極端な分裂——実に聖人から山師にいたる——は、その作業をおこたったところに大きな原因があると思われる。時間の風化作用による王通像の変貌、それはぎわめて魅力あるテーマだが、そのテーマをあつかうためにも、王通の実像をいくらかでも鮮明にする、いささか退屈で生彩にとぼしい作業が、まず必要であろう。

二

王通の実像にせまるための有力な糸口をあたえてくれるのは、王通の実弟王績、いわゆる東臯子^{アガタ}が、両『唐書』それぞれに隠逸伝に立伝されていることである。たとえば『新唐書』のその伝は、はなはだ簡単ながらも、王通についてつぎのごとく言及する。

兄の通は、隋末の大儒なり。河汾の間に徒を聚め、古に倣

いて六経を作る。又た中説を為りて論語に擬す。諸儒に称道せられざるが故に書は顯れず、惟だ中説のみ独り伝わる。

しかも幸いなことに、王績には『東臯子集』が伝わっている。ただし今日の『東臯子集』は、呂才の編した原型をつたえるものではない。今日のテキストはただ三卷であるのたいし、『唐書』芸文志、『直齋書録解題』、『郡齋読書志』、また『唐文粹』に収められる呂才の「東臯子集序」は、いずれも五卷と記すからである。『四庫提要』が指摘するところ、あるいは宋末に一たん散佚したのを、後人が『文苑英華』や『唐文粹』等から採拾しなおしたものである。また晁公武が呂才の序として引くところの、「年十五、楊素に謁するに占对英弁なり。一坐^{とと}尽とく傾きて以て神仙童子と為す。また薛道衡はその登龍門憶禹賦を見て歎じて曰わく、今の庾信なり、と。かつその卜筮の驗ある者数事を載すと云う」なる文章は、今日われわれの目にする呂才の序にまったくみえず、また「登龍門憶禹賦」も伝わらない。しかしともかく、王績の行状をもっぱらに記す呂才の序は、両『唐書』王績伝の有力な材料ともなっていると思われ、王績の伝記資料としてはなほ貴重なるものであ

る。呂才のことは、侯外廬編『中国思想通史』第四卷第二章「呂才的唯物主義和無神論思想」にくわしい。みずから語るところでは、李播、陳永とならんで王績と莫逆のまじわりを結んだ友人であった。陰陽曆数の術を通じての親交であったらしい^⑥。私は、東臯子王績を手がかりとして、文中子王通にできうるかぎり接近してみたいと考える。

三

王績の飄逸と評さるべき風格は、後世、蘇東坡のはなはだしく愛^⑦するところとなった。王績がなにもまして愛したのは、酒であった。両『唐書』の記事は、酒にかんする話柄ばかりだ、といってもけっしていいすぎではない。当然のごとく、『東臯子集』も、酒にかんする作品でうずまっている。

いわく「醉郷記」。醉郷は中国を去ること何千里にあたるのであろうか。その土地は曠然としてかぎりなく、丘陵や急坂がない。その気候は和平で変調がなく、晦明や寒暑がない。その風俗は太平で、邑居や聚落がない。その人間はきわめて健康で、愛憎喜怒することがない。風

を吸い露を飲み、五穀を食せず、スヤスヤと眠り、悠然と歩いている。魚や亀、鳥や獸と雜処して、舟車や器械のはたらきを知らない。黄帝いらい、中国の帝王が酔郷と交渉をもった時代は平和に治まったが、秦漢にいたって中国は喪乱し、酔郷と没交渉となった。しかし、道を愛する臣のなかには、こっそりと出かけたものがしばしばある。阮嗣宗や陶淵明たち十数人はそろって酔郷に遊び、終生もどらず、死してその地に葬られた。中国では彼らを酒仙とよんでいる。ああ、酔郷氏の俗は、古の華胥氏の国ならんか。なぜかくも淳寂なのであろうか。この酔郷こそは、陶淵明の桃花源にもにて、王績にとつてのユートピアであった。彼もそこに遊ばんとして「酔郷記」を書いたのだという。^⑧

いわく「五斗先生伝」。五斗先生なるものがあり、酒徳によつて世間とつきあっている。酒をよんでくれるものがあると、あいての貴賤にはおかまいなしに出かけてゆき、出かけてゆくと必らず酔いつぶれる。酔いつぶれるところかまわず横になり、醒めるとまた起きあがつて飲みはじめ。いつも一度の酒量は五斗。それで五斗先生と号するのである。先生はこせこせ思ひわずらわず、また寡黙であり、

天下に仁義や厚薄のあることを知らない。忽焉として去り、倏焉として来たり、その動くこと天のごとく、その静かなること地のごとく自然であるので、万物も彼の心をからめることはできない。いつもの口ぐせはこうだ。「天下のことは大抵すけて見える。生はどうして養なうに足ろう。しかるに嵇康は養生論を著わしたとは。途はどうしてゆきずまろう。しかるに阮籍は慟哭したとは。故に昏昏黙黙たるのが聖人の境地なのだ」。かくて志のままにふるまっているが、はてどこへゆくのかしら。これは彼の自画像にほかならぬであろう。

いわく「祭杜康新廟文」。杜康はいわずと知れた酒の神さま。「嘯嗟世の道は、一に此に至るも、達人は大観し、其の礼を和するを貴ぶ。物に制せられんよりは、寧ろ己れに在し、流れの乘に則ち逝き、坎みに遇えば則ち止まる。茲の酒徳を眷るに、以て身を全うす可し。明を杜ざし智を塞ぎ、垢を蒙り塵を受く。阮籍は性を遂げ、劉伶は真を保つ。此もて其の世を避くるもの、今において幾人かあらん」。そして龍門にたてられたこの杜康廟に配食されたのは、太業署史の焦革であった。焦革の家は酒造りで名がた

かかったので、王績は太楽丞にしてくれるよう懇請し、おかげで美酒にありつくことができた。阮籍の歩兵校尉就任をおもわせる。革の死後も、その妻袁氏が酒をとどけてくれた。だが袁氏が死んでしまうと、天は乃わち吾をして美酒に飽かしめざるか、と嘆じ、あっさり職を退いた(呂才の序)。

あるいは焦氏の酒造秘伝書『焦革酒経』一卷をあらわし、杜康、儀狄いらいの酒造家列伝『酒譜』一卷をあらわし、またさいしよの仕官を酒でしくじったのを郷人からそしられたとき、「無心子伝」をあらわして自分の気持を託した王績。阮籍や劉伶、陶淵明の後継者をもって自任し、李淳風から、「酒家の南薫」と評された王績の人がらを、さらに彼みずから語らせればつぎのごとくである。

王績なる人物は、父母はあっても朋友はなく、みずから無功と字している。ある人がそのわけをたずねたが、あぐらをかいたまま答えなかった。けだし、わが身に道はそなわっていながら、時世にとって役にたたない(無功)からだ。読書しないでもおおのずから理に達し、榮辱にかまわず、利害を計算しない。仕官して俸禄位階をもつ身とはなったが、教職を

歴任してやっと一階級昇進するまで、才はたかいが位はひくく、譴責処分をくわれないのがやつのことだった。天子さまはおみしりなく、公卿がたにも面識はなく、四十、五十になってもうだつはあがらぬ。そこで官を退き、酒徳によって郷里くわにでぶらぶらしている。ときおり売卜をし、しじゅう著述をする。出かけてもまるでゆくあてはなく、坐っけてもまるで腰をおろしていないみたいだ。郷人むらびとには自分の気持をわかってくれるものがない。いつも東の阜おぼで野良仕事をやっているの、世人は東阜子と号している(自撰墓誌)。

かく、儒者先生王通にはおよそ似つかわしくない弟で、彼はあった。『中説』のなかに王績は前後二度顔をのぞかせるが、そのどちらの場合も、兄からひどくしかられている。

先生の仲の弟の績は字を無功といった。先生はいわれた。「字をつけるのは友人のしごとだ(自分でつけるものではない)。神人へ無功『莊子』逍遙遊、というが、おまえにはふさわしくない。』そしていつも名でよばれた。(礼楽)

無功が五斗先生伝を書くと、先生はいわれた。「おまえは天下を忘れたのか。したい放題の無軌道ぶり、わしは賛成できんぞ」。(事君)

ここで、「汝、天下を忘れたるか」と王通がたしなめているのは、弟の王績とはまったくあい反して、王通の視点が、まさしく天下にむけられていたからにはかならなかつた。^⑨「みたところ文中子の基礎は浅いけれども、天下をもって心とし、明らかにこれを事業にあらわそうとし、天下の事をすべてそっくり思慮にいれている。浅薄ではあるが規矩にふみしたが、い、事業をなそうとする人物であつて、その心は公である」(『朱子語類』同上)。この朱子の論評の正当性は、『中説』のつぎの言葉によって確認されるであらう。

「わが身を忘れてしかるのちに無私でありえ、無私にしてしかるのちに至公でありえ、至公にしてしかるのちに天下をもって心とすれば、道は行なうことができる」(魏相)。そしてまた朱子は、「自分一個の憂疑がないがゆえに天下を憂疑することができるのであり、天下を憂い、天下を疑うがゆえに自分一個の憂疑がないのだ」といっている。これは王通が、魏徴にたいしては、「天下がすべて憂うるのにわれ一人憂えずにおれようか。天下がすべて疑うのにわれ一人疑わずにおれようか」と説きながら、董常にたいしては、「天を楽しみ命を知れば、われになにの憂いがある

うか。理を窮め性を尽くせば、われになにの疑いがあるうか」と説いている(問易)のを統一的に解釈しようとしたものである。この矛盾した言葉を、王通自身は「心跡の判」―魏徴に説いたのは跡、董常に説いたのは心―と説明しているが、朱子は上のように解釈したのである。つまり、王通の思想の根底にある天下の思想とは、その身を独善するのみにあらずして天下を兼濟する、といわれるそれであつた。王通に先行する六朝においてははなはだしく稀有であり、六朝的思考にたいする反省がおこるとともに、諸人によつて強調して説かれることになる思想であつた。^⑩朱子もそこに『中説』の先駆性を発見したのである。

さて王績は、隋の大業末年、孝悌廉潔科に挙げられて高第にパスし、秘書省正字を授けられたが、窮屈な中央官庁づとめは性にあわず、揚州六合県丞を希望してゆるされた。しかし、酒にあけくれる生活をしばしば上官より指弾され、かつまた各地に蜂起をくりかえす民衆叛乱によつて天下が騒然となつてくると、俸銭をそっくり県城門前につみあげてそこを逃げだし、一時河北に客遊したのち、故郷の龍門にひきあげてきた。そのご、唐の武徳中に待詔門下省とな

っているが、それというのも、一日三升の酒の配給にあずかれるためであった。彼は旧知の侍中陳叔達^①のはからいに
より、一日一斗を特配され、斗酒学士の異名をとったとい
う。だがそれも貞観のはじめに足疾のため退職した。そし
てもう一度、すでのべたように、やはり酒にひかれて太
樂丞となったのが、さいごの官僚生活であった。かくして
王績は、一生の大部分を故郷の龍門ですごしたものと思わ
れる。

龍門における王績の生活は、まことに気ままなものであ
った。

問君樽酒外 君に問う樽酒の外^{ほか}

独坐更何須 独坐更に何をか須いん

有客談名理 名理を談ずる客有り

無人索地租 地租を索める人無し

三男婚令族 三男は令き族と婚し

五女嫁賢夫 五女は賢き夫に嫁す

百年随分了 百年のよわいは分に随いて了き

未妻陟方壺 未まだ方壺のやまに陟るを妻やまず(独坐)

令族と婚姻しえたのは、王氏が門閥としての社会的声望

を有していたおかげであろう。地租をもとめられること
なかつたのは、彼が地主であつたからにほかならぬ。

わが河の落^{なかつ}には先人ののこしてくれた田地十五六頃がある。
河水がぐるりをとりまき、東西とも岸までの距離は数百歩
ある。河済の浜は黍によし、とは古人の言であるが、まして
ここは中原の肥田なのだ。兄^②さんは実にもわかりのよいか
ただから、僕がわがまま放題の人間であり、お辞儀のしかた
ひとつ知らず、礼義や功名なんか糞くらえと思つてること
を理解され、俗外の徒としてとりあつかつて下さり、家の用
事でしづめることはなさらぬ。むらの慶弔や親類縁者の冠婚
とすつかりご無沙汰してから、もう五六年にもなる。一族の
ものは僕のことを山麋、野鹿とみなしている。生れつき琴と
酒をたしなみ、気持がさっぱりしさえすれば、幸福このうえ
もない。近ごろはまたまたあつさり家庭をすて、河落での一
人ぐらし。茅屋と厨、厩あわせて十余間をかまえた。用をた
すには数人の奴婢で十分である。天の道を用い、地の利のわ
けまえにあずかり、黍^{もも}と稷^{もも}だけを作付けしている。春秋
には酒のしこみ、またたくさんの鬘や雁を育て、鶏や豚を飼
い、黄精、白朮、枸杞、薯蕷^{さつじゆ}を朝夕に摘んで服餌に供してい
る。枕辺の素書教帙は莊子、老子と易だけで、そのほかはめ

ったに開いたことがない。ふっと兄弟のことがなつかしくなると、河を渡って家に帰り、舟を岸辺にもやっておき、興がつかるとひきあげてくる。(答馮子華処士書)

彼の住まう河渚には四隣とてないが、あえて隣人といえ、南渚に菴を結ぶ仲長先生であった。

先生の諱は子光、字は不曜。洛陽の人と自称している。河東に出かけ、勞働力を売って自活した。住居もなく、妻子とも縁をきり、開皇末年にはじめて河渚に菴を結んで身をいこわせた。十余年の間、売葉を業とし、だれ一人知るものとなかったが、占筮で名だかい汾陰の侯生は、河渚に遊んだおり、一目あうや、「東方朔、管輅でさえ及びもつかぬ」と感伏した。そのためばつと評判がたち、太守県令として赴任してきたものは、すべて親しく先生をたずねたが、先生は瘡痍を口実にして、一度も言葉をかかわさなかった。独遊頌、河渚先生伝を著わしてみずからにたとえ、識者のなかには懸解(束縛からの解放)たるを知るものがあった。道を請うものがあると、老易の二字を書いて示した。彈琴餌葉して一生をおわった。文中子は彼を虞仲夷逸になぞらえている。(仲長先生伝)

王績は、「独遊頌」「河渚先生伝」を玩味熟読し、また自作の「河渚独居賦」を示したところ、薛収の「白牛溪賦」

に匹敵しうる名品と激賞されたという(答馮子華処士書)。そして彼が卒するや、その柩前に祭文を捧げるなど、王績の仲長子光にたいする傾倒ぶりはなみなみならぬものを思わせるのであるが、いっぽう王通と仲長子光の二人も、たがいにあいての人格をふかく尊敬しあった。

仲長子光の字は不曜、董常の字は履常。先生はいわれた。

「それぞれの徳にかなっている」。(礼楽)

薛収が政治について仲長子光にたずねると、子光はいった。

「一本の綱をひっぱるともろもろの綱目はびんと張り、一つの機かまきをゆるめると万事がしぼんでしまうものだ。さて政治のことはどうか」。収が文中子にそのことを告げると、先生はいわれた。「子光はポイントをつかんでいる」。(関朗)

仲長子光はいった。「危地にあつて奇策をめぐらすことは、平和に身をおいて無為たるには及ばない」。文中子はそれを知言とされ、こういわれた。「名が消えれば消えるほど徳はのび、身は退けば退くほど道は進む。この人はこの点をわきまえている」。(礼楽)

儒者王通にして、「其ノ名弥ヨ消エテ其ノ徳ハ弥ヨ長ジ、其ノ身弥ヨ退キテ其ノ道ハ弥ヨ進ム」という、あきらかに『老子』の「道ハ無名」を意識した言葉のあることは、注

目にあたいしよう。さらにまた、つぎのごとき言葉のあることは、いっそう注目にあたいしよう。

先生が仲長子光にたずねられた。「山林は居心地がよろしいか。」「たまたま自分のこのみになつていただけです。よいかよくないとか、知つたことではありません。」「達人だ、

隠居シテ言ヲ放ク論語微子、というものだ。子光は退席すると、董常、薛収たちに行った。「諸君の師は至人だ。死生を」とし、死生によって左右されるところがない。(周公)

達人の語は、王績が「達人は大観す」(先引の祭杜康新廟文)といつていふのと同義であるにちがいない。また説くまでもなく、至人は、『莊子』がえがくところの絶対者であり、生死の対立を一とみることによって生死の束縛を超克せんとするのが、『莊子』の有力な主張であった。王通はまた仲長子光のことを、天人とか(天地)、天隱(礼樂)とか評している。天人というのは、その形は眇然たるがゆえに人間に属するが、その道は曠哉として大なるがためだという。

天隱とは、「往くとして適わざるはなく」、「世を遁れて悶えることなく」、「可もなく不可もなき」隱である。それは、名隱、人隱、地隱の上位におかれる。すなわち、隱の最高型

態であり、至人に対応するのがこの天隱であった(周公・礼樂)。かかる儒家的ならざる言説が、儒家的ならざる仲長子光への言及に触発されてとはいいいながら、『中説』にみられることを、ここでひとまず指摘しておかねばならない。

四

王通と王績とは、なにかにつけて対照的な兄弟であった。にもかかわらず、王績の兄にたいする尊敬と思慕は深厚なものがあつた。とりわけ「遊北山賦」には、王通が教授を行なつた白牛溪の描写のなかに、兄への追憶が切切とうたわれている。その賦が制作されたのは、兄の死から二紀、つまり字義どおりに解釈すれば二四年、が経過していたときであり、またその自注に、王通が隋の大業十三年(六一七)に卒したといえ、唐の貞観一四年(六四〇)前後の作品ということになる。

白牛溪裏には、峯と巒と四もに峙つ、信に茲の山の奥域は、昔し吾が兄の止りし所ぞ、許由の地を避け、張超の市を成すがごとし、俗を察うかがいて詩を刪り、経に依りて史を正す、康成鄭玄のともがらは笈を負いて相い繼ぎ、根矩兩原のやからは

衣を搦て未まだ已えず、組帯と青衿は、緞縹としてたかなり儼儼としてさかんなり、階庭には礼楽あり、生徒は杞梓にたとえられ、山は尼丘の似く、泉は洙泗かと疑わるるに、忽焉として四散し、今に于いて二紀なり、地は猶お昨の如きも、人は今や已れり、昔日の良き遊を念い、当時の君子を憶うに、蘭を佩び竹に蔭い、茅を誅り、芷を席ぎ、樹は即わち琛林、門は闕里と成る、姚仲由は色を正し、薛莊周は理を言い、石に触れば肱を横にし、流れに逢えば耳を洗う、経籍に樂しみを取り、憂喜に懐いを忘る、時に策を挟んで羊を駈い、或いは竿を投げて鯉を釣る、何ぞ凶らんや一旦にして、逸けくも千祀と成らんとは、木は壞たれ山は頽れ、舟は移り谷は徙る。

姚仲由は姚義の異名、薛莊周は薛収の異名。自注に、「この溪の門人は常に百をもつてかぞえたが、そのうち河南の董恒（常）、南陽の程元、中山の賈瓊、河東の薛収、太山の姚義、太原の温彦博、京兆の杜淹ら十余名のみが後世から品題された。姚義は慷慨のたちであつたので仲由子路になぞらえられ、薛収は理識により莊周になぞらえられた。薛はまことに玄理にすぐれていた」とみえてゐる。この「遊北山賦」に描写された王通は、自然のなかにいこい、

経籍をともし、多くの弟子たちにかこまれて、まことに幸福そのものに見える。しかし実は、彼が龍門に退いた歳月、ことにその後半は、「諒に時の喪乱に遭える」時代であつたのである。

王通の行状は「文中子世家」にくわしい。しかしこの一篇が、あまりにも粉飾にとむことは、一読すればあきらかなところである。ところで、『全唐文』卷一三三には、薛収の「隋故徵君文中子碣銘」なるものが収められている。

なにからの採録であるのかをあきらかにしえないのは遺憾であるが、のちに説くように、薛収が王通の門人であつたことは、ほぼ疑いが無い。やや不安を感じつつ、いまそれにしたがえば、王通は、一八歳のとき秀才に挙げられて高第に及第し、その翌年、蜀州司戸を拜命したが就かず、煬帝が即位し、年号が大業とあらたまるや、経籍の制作に専念した。そしてその間のこととして、もとより「文中子世家」も説くところであるが、『通鑑』隋文帝紀仁寿三年（六〇三）の条につき記録がある。「是の歳、龍門の王通、闕に詣りて太平十二策を獻ず。上用うる能わず。罷め帰る。通は遂に河汾の間に教授す。弟子の遠くより至る者甚だ衆

し。累徴せらるるも起たず」。

太平十二策はいかなる内容のものであったか。『中説』にはつぎのようにいっている。「元魏いご天下に主なきありさまであった。開皇九年に民ははじめて統一された。父君は、その事を敬まうものはその始めを大にし、その位を慎しむものはその名を正す、といわれたが、これこそ私が仁寿中に献策した理由であった。陛下はまことの帝王であらせられる。偽乱をつがれることなきように。必らずや周漢のあとをうけ、土徳をもって火徳を襲い、色は黄をたつとび、数は五を用い、北魏、北齊、北周、陳四代の法を掃除して天命に乗せられたまえ。千載の一時をのがすべきではありません、と。高祖は偉とせられながら、しかし採用されるところとはならなかった」(関朗)。この献策が採用されなかったために、王通は龍門に退いたのである。そして統経の編纂がすすめられたのである。太平十二策が採用にいたらなかったことと統経の編纂とは、有機的に深くかわりあっていた。「十二策がもし世に行なわれていたら、六経は統纂されなかつたらう」、王通はそういっている。なぜなら、太平十二策は天地人三才の道を擧げたもの

であって、もし採用されていたならば、「不言の教が行なわれ、万物とともにいこう」太平が現出しえていたはずだからである(述史)。したがって、六経の統纂は、王通にとつてあくまでも次善の策でしかなかった。六経が統纂されたときは、太平十二策の学習がまったく無意味であるほど、「時は異なり事は変っていた」のである(魏相)。

龍門に退いた王通は、「逸歩を局めて時のめぐりを須ち、奇声を蓄えて旦を待った」(避北山賦)。しかし、大業八年(六一二)いご、数次にわたる高句麗遠征をきっかけに、状況は日一日と混迷の度をふかめていった。とりわけ大業九年(六一三)六月に黎陽を拠点として勃発した楊玄感の乱は、彼が現王朝の礼部尚書であり、また文帝時代の権臣楊素の子であるということ、隋朝にあたえた衝撃はきわめて大きかった。おりしも第二次高句麗遠征中であつた煬帝は、乱の報に接すると、ただちに軍の撤収を命じ、叛乱鎮圧にあたらせた。叛乱はわずか数月で終息したものの、これを境として、それまで高句麗遠征軍の兵站基地ともいふべき山東地方を中心に、局地的に発生していた民衆叛乱は、燎原の火のごとく全国に波及するにいたつたのである。とこ

ろで『中説』には、乱をおこした楊玄感が、使者をさしむけて王通を幕下に召そうとした、といっている。そのとき王通は、「天下は崩乱し、王公の血誠がなければ鎮めることは不可能だ。いやしくも正しい道によらぬのであれば、禍の先がけとはなりたもうな」といって拒否したという(天地)。王通の門人賈瓊が楊玄感につかえた因縁によるのであろうか(簡易・礼樂・述史)。また楊玄感の乱の謀主であり、乱敗れてのち、しばらくの雌伏の期間をへて、隋末の群雄中の巨星となる李密とも、王通が交渉をもったことを、『中説』はつたえる(天地・周公)。

かく『中説』は、王通の身辺がけっして平穩でありえなかつたことをかたっている。『中説』の記事すべてをにわかには信じがたいとしても、しかし疑うべきもないのは、大業末年において、彼の退いた龍門とその周辺が、もつともホットな状況におかれる地域となったことである。大業十一年(六一五)四月に、山西河東慰撫大使、ないしは太原道安撫大使として太原に駐屯し、該地方の文武官の黜陟遷補、兵馬の徵發と盜賊の討捕を命ぜられたのこそ、李淵、すなわちのちに唐高祖となる人であり、¹⁵⁾やがて彼の率いる

軍勢は汾水ぞいに南下して、龍門とその周辺の地域を支配下に収めつつ、長安に進むことになるからであった。『大唐創業起居注』には、「河東已來の兵馬、仍お帝をして徵發せしめ、所部の盜賊を討捕せしむ」とあり(卷二)、あるいは李淵がのち霍邑をおとしられたとき、「河東已東は孤の使たりしところ」といっているから(卷二)、李淵の太原赴任のはじめから、龍門も彼の管轄に属していたにちがいない。はたして、彼が大使たりしとき、龍門県界において河水の清むのを見たことが、『起居注』卷二には記されている。また大使就任の年に、龍門の賊毋端兒を破り(旧・新紀)、あるいは樊子蓋にかわって、絳州の賊柴保昌、敬盤陀をうち、数万人をくだしている(新紀)。このように、民衆叛乱は、王通のすぐ近くでもしきりに火の手をあげていたのだ。大業十二年(六一六)十二月に、李淵の肩書は太原留守とあらたまる。そしてあくる大業十三年(六一七)こそは、彼にとつてまことに多事な年となった。『起居注』によつてあらましを示そう。

二月己丑、突厥を後楯とする馬邑の軍人劉武周は、太守王仁恭を殺害すると天子を自称し、南下して汾陽宮を占拠。

三月には、朔方郡民梁師都がやはり太守を殺害して天子を自称。五月丙寅から己亥にかけての十日間は、突厥数万騎が李淵のまま太原を襲来。しかし、李淵の処置よろしきを見て大過なくおわり、突厥軍の手引をした科で副留守の王威と高君雅を獄に繋留して失脚させ、また突厥始畢可汗とあらたに盟約を結んだ。その結果、太原において突厥の馬匹千匹が交市され、李淵拳兵のさいには援兵を送る約束がかわされた。それいごは、拳兵にむけての日程が着実に消化されてゆく。すなわち、李淵とともに太原にあった李世民のほか、李建成と李元吉が河東からよびよせられ、義士の召集が積極的にすすめられた。さいしょの軍事行動は、六月己丑の建成と世民による西河城平定であり、「入関の策」が決定されたのは、実にその軍が太原に凱旋した日であったという。そして大將軍府が開かれて組織がととのうと、元吉に太原の留守を命じ、三万の軍勢はいよいよ長安にむけて進発した。七月壬子のことであり、その日、武徳の南に軍營が移された。いこの行軍の道程はつぎのごとくである。

七月癸丑には清源、丙辰には西河、さらに雀鼠谷より靈

石県に達した。壬戌にいたって秋霖にふりこめられ、行軍は難渋をきわめたため、やむなく霍邑をさること五十余里の賈胡堡に駐屯した。ともすれば弱気におちいり、太原に軍をかえそうという父李淵を世民ははげましつ、開齋をまつ間に、事態はしだいに李淵にとって有利に展開してゆくごとくであった。一つは、霍太山神の使者と称する白衣野老があらわれ、霍邑へは東南にむかって山ぞいの道をとるべきを教えたこと、二つは、突厥から兵馬援助の報がとどいたこと、三つは、李密から合従の申入のあったこと、である。李密との連携は、東都洛陽に拠る王世充の注意を西方からそらせるうえにきわめて効果的であろう。やがて八月己卯、ついに長雨がはれると、軍隊は白衣野老の教えどおりに道をとる、辛巳には、隋の驍將宋老生が死守する霍邑を陥落せしめた。霍邑の戦鬪がはなはだ酸鼻をきわめたため、李淵はいご、「まさに文徳を以てこれを来けしむべく、復はや兵戈を用いざらん」ことを心にきめ、「いまだ婦附せざるものは、郷村保塲、賢愚貴賤を問うことなく、咸て書を遣つてこれを招慰し」、軍門に入ったものには朝散大夫以上の位階をあたえたので、逸民道士の類にいたる

まで彼に心服することになった。ついで丙戌には臨汾郡に入城し、庚寅には、絳をさること西北十余里、かつて李淵が大使たりしとき屯營したゆかりの鼓山に宿し、翌辛卯、通守陳叔達が堅守する絳城を少時の戦鬪のうちにくだした〔『元和郡縣圖志』卷二二〕。そして癸巳には、いよいよ王通、王績たちの故郷たる龍門県に歩武をすすめ、そこで突厥からの兵五百人、馬二千匹をうけとった。李淵の率いる軍勢は、そのご、汾陰、壺口、河東郡を通過し、そこから河を西にわたって、ついに十一月丙辰、隋の代王楊侑の留守する長安に入城したのである。

さて、先掲の「隋故徵君文中子碣銘」は、王通が大業十三年五月甲子（十五日）に卒去したといっている。五月甲子といえば、李淵軍の龍門到着にさきだつこと三月であり、李淵が副留守の王威と高君雅を収繫した、まさしくその日であった。高君雅は煬帝のもと腹心の部下であり、「帝李淵が甚だ太原内外の人心を得しために、龍顔を瞻仰して異志あらんと疑い、毎に王威と密かに帝の隙を伺っていた」のである。そこで李淵は五月癸亥（十四日）の夜、北辺防衛の名目で召募され、興國寺にとどまっていた兵士五百

人を長孫順徳、趙文恪たちに率領させ、李世民の指揮のもとに、晋陽宮城東門附近に配置して不意に備えた。あけて甲子（十五日）、晋陽県令劉文静に導かれた開陽府司馬劉正会は、「高君雅、王威たちが北蕃と私通し、突厥を引いて南寇せんとしている」と証言し、李淵は文武の諸官を召集したうえ、二人を獄に繫留した。『隋書』煬帝紀大業十三年の条をひらけば、「五月辛酉夜、流星の甕の如き有り、江都に墜つ。甲子、唐公起義し、太原に師す」と記されている。すなわち王通卒去の日を、ほかならぬ李淵起義の日とさだめているのである。

臨終をむかえた王通にかんしては、『中説』に一つの記録がある。

先生が危篤状態におちいられたとき、江都に交のおこったことを聞かれた。先生ははらはらと落涙され、身をおきなおすと、「民はもうとっから乱世にあきあきしている。天はあるいは堯舜の運をひらかんとするのであろうか。だがわたしはそれにあずかることができない。天命だ」といわれた。

（王道）

ここの「江都有変」に、阮逸は、「大業十三年、煬帝の

江都宮に幸せしおり宇文化及弑逆す」と注している。しかるに煬帝が弑逆されたのは大業十四年三月、王通の死におくれること十月であつて、はなはだしい事実誤認である。

「文中子世家」が、「大業十三年、江都に難、作るや、子は疾有り」と、これまたあきらかに宇文化及弑逆事件を思わせる書きぶりをとっているのも、誤りとせねばならぬ。しからば「江都有変」とは、なにをさしているであろうか。思うにそれは、『隋書』にいう江都宮に墜ちた流星をさすのにちがひあるまい。本紀には五月辛酉(十二日)とするが、天文志下には辛亥(二日)の事件として、つぎの記録がある。「大流星の甕の如き江都に墜つ。占に曰わく、其の下、大兵戦あり流血し、破軍殺將有らん」。「文中子世家」に、王通が江都の難の消息を聞いてのち七日にして死んだとあるのに整合させるとすれば、辛亥とする方が適切であろう。それはともかく、かかる天文の異変が、乱世にあきあきしていた王通の心理に、乱世を終結せしめ、堯舜の世を再現せしめる人事上の一大転換の予兆と映じたとしても、なんら不思議ではない。

以上にのべたことは、はなはだ小さな考証上の問題であ

る。しかし、この誤認から派生する問題はかならずしも小さくはない。それは、堯舜云云について、阮逸が、「唐の太宗は堯舜の道を行なう。而して文中子は已に死せり」と注することである。そして李觀がこをひきあいだして、王通の門人が彼を顕彰するため、唐太宗時代の著名な公卿を『中説』に登場させた嘘のはれるのをおそれ、「唐帝に媚びた」と解することである(『直講李先生文集』卷二九、説文中子)。すなわち、堯舜がただちに唐帝に結びつけられ、そのことが『中説』の真贋をうらなう一つの重要なポイントとされているのであるが、あまりにも放恣な説とすべきではあるまいか。『中説』の随処に、聖人待望の思想が顕著に認められることは否定しえない。しかしながらそれは、あくまで隋煬帝の悪世の反措定として聖人の出現が待望されているのであり、特定の唐帝に結びつくものではない。よしんば李觀のごとく、王通の言葉の実録でなしに、門人の粉飾と解するにしても、ただちにこれを「唐帝に媚びたるもの」とするのは酷評にすぎないか。将来の唐帝となるべき人、すなわち李淵や李世民について、とりわけ絳州や龍門にまで足跡を印したことのある李淵の為人について、王通がわ

きまえていたことは十分に想定できるにしても、王通卒去のときには、まだ堯舜と思いがかれるほど、彼らは突出した存在ではなかったはずである。

五

だが王通は、その死後において、唐朝と深いかわりをもつことになった。『中説』にしたがえば、彼の門人や交渉のあった人たちのなかから、唐初の名臣が多数生れたからである。そのような一人が、李淵軍に抵抗をこころみた絳郡通守陳叔達であった。陳叔達は陳宣帝の第十六子。亡国ののち、内史舎人より絳郡通守となり、李淵に投降後は丞相府主簿として温大雅とともに機密をつかさどり、禪代の書冊詔誥を草した。武徳時代に黃門侍郎、侍中、貞観時代に礼部尚書となっている。『中説』に登場する陳叔達は、なかなか有徳な民政官である。たとえば、

絳郡通守の陳叔達は盜賊逮捕令を下した。そこには、「功をあせるな。更生を願うものはゆるし、その後のふるまいを観察せよ」とあった。このことを聞かれた先生はいわれた。

「陳通守はともに政治を語りあえる人物だ。上が道を失し、

民が流亡をはじめてから久しくなる。君子でもないかぎり、窮乏にたえられたものではない。彼らを徳によって導き、彼らに信をさし示し、しかもその後のふるまいを観察するとうう。いいことではないか」。(事君)

陳通守が辭取にかたった。「ぼくが郡県に布令を出しても盜賊は跡をたたないが、先生王通はいなかにおられながら、訴訟事件がぶつりなくなったのは何故だろう」。「一方は言によって教化し、一方は心によって教化するからだ」。「ぼくのまちが良かった」。そして、ひきこもって静居すること三月、その間に盜賊は郡境から退散していった。このことを聞かれた先生はいわれた。「収は説得力がある。叔達は有徳者だ」。(周公)

これらが実録であるかどうかはわからぬが、王通と陳叔達とのあいだにたしかに交渉のあったことを否定しえない証拠がある。王通の死後、すでに唐の侍中となった陳叔達と王績とのあいだにかわされた往復書簡である。王績の兄であり、王通の兄でもある芮城府君が大業末に撰述した『隋書』が、大業初年の記事までで未完になっているのを続纂するため、よるべき参考史料として、陳叔達の撰にかかると『隋紀』の借覽をかさねてねがいでた書簡である。そこに

は、弟の千牛、というのは千牛備身であった七弟の王静のことであろうが、その千牛と家人の典琴をわざわざ使いついてやりながら、なかなか借していただけないのは、いまだや達官となられたあなたが、いまなお邸壑に棲遅している私との「昔時の好誼を忘れられた」ためであらうか、などといやみの言葉がならべられている。それにたいして陳叔達からは、芮城に『隋書』の著述があったとは知らなかったこと、ただちに自分の『隋紀』を高覧に供し、また異聞にそなえるため、王胄の『大業起居注』^⑩をあわせて送るべきこと、がしらされた。そのなかで陳叔達は、あわせて史道の頽靡に説き及び、こうのべている。

かくのごとき状況をわきまえられた賢兄、文中子は、後世の筆削が繁穢におちいり、宏綱正典が闇におおわれて闡明されなくなることを危惧された。そこで『元経』をたてて真統をさだめられた。けだし獲麟の事はとりたてて知るにあたいしない、という態度をとられたのである。亡國の生ぎのこりである叔達は、幸いにも先祖の威光のおかげで、隋朝の末年、貴郡の長官をかたじけなくし、すぐれた誘掖にあずかって、偉大な教をいささか知ることができた。さて、梁魏(陳?)

周齊の間のことは、わが耳目や故老を通して接するところで、風流や人物の名実を知ることができ、衣冠の道義についてはいままお人の口端にのぼっている。近年、偉大にも唐朝が樹立され、士君子の世がやってきた。時運の到来に恵まれ、近侍の職をかたじけなくした私は、廟堂でのひまつぶしに、経籍をながめることをたのしみとしているが、後魏や周、齊の紀伝をながめ、それを下官の見聞したところにてらしあわせてみると、喜怒曲直は恣意的であり、叙述は浮雜、褒貶はえこひいきがすぎざるはなく、一代の名士についてのべるときには、爵祿のたかきを美談とし、國家の歴史を語るさいには、權謀術数を能事としている。密かに王道に合一するとか、潜かに生民を濟うとかのことは、耳にしたこともないため、さっぱり記されていない。父祖の榮達ぶりやあと、^⑪の縁組を叙して譚談の証拠とすることばかりにあくせくしている。痛ましいことだ。風俗の頽靡はここまでですんでいるのである。人倫や王化のことはつぶさに『元経』に列せられているけれども、すぐれた言論にもすてがたいものがある。そこで薛記室薛取と賢兄の芮城は、たえず魏周の歴史に心をいためられ、それぞれ春秋をあらわしたのである。最近あらためて読みなおしてみたが、まことに立派な史書である。古人の言に、高

唐を過ぎるものは王豹の諷を学び、睢渙に遊ぶものは漢絵の功を学ぶ、とあるとおり、隋氏が支配した三六年間の成敗消長をしたしく目にした私も、後世の作家たちがふたたび従来
の弊風にならうことをおそれ、それで侍中の職務のひまをぬ
すんで、『隋紀』二十巻を著わしたのである。文章流離とい
う点は自信がないが、叙事の簡要にはたえず心がけた。孔子
が、我レコレヲ空言ニ載セント欲スルモ、コレヲ行事ニ附ス
ルニ如カザルナリ、といっているのは、あるいは私の立場に
近いであろうか。

陳叔達が「賢兄文中子」とよんでいることに注意を喚起
したい。陳叔達と王通との関係は、師弟というのではなく、
地方長官と郡内の尊敬すべき先生、といったものであった
のではあるまいか。また『元経』にも、全面的には同意で
きなかったごとくである。「人倫王化は備さに元経に列す
と雖も、恢談頌議の或いは捨つ可からざるもの有り」とは、
『元経』が、要するに歴史哲学の書であって、人間の歴史
としての興味と真実とにかける点があることにたいする率
直な不満を示しているのではあるまいか。陳叔達の『隋
紀』がどのような内容をそなえていたか、今日では知るよ

しもない。いっぽう『元経』については、先述したごとく
現行のものが偽書であるとすれば、『中説』中の言及から、
その制作の意図あるいは性格をさぐるよりほかに方法はな
い。

『元経』は晋惠帝の太熙元年（二九〇）より隋文帝の開皇
九年（五八九）におよぶ歴史書である。それは、漢の統一に
はじまり晋武帝の末年にいたる『統書』のあとをうけるも
のである。春秋と書と詩とが孔子にとつての史であつたよ
うに、王通は『元経』と『統書』と『統詩』を著わしたが、
そこには、司馬遷、班固いごの史道の頹廢をすくい（王道）、
また文を耀やかすだけの今の史を道を弁ずる古の史にかえ
さんとするねがいがこめられていた（事君）。『元経』が対
象としてあつかう三百年は、恣意的にくぎられたのではな
い。帝制の失なわれた時代、としての共通の性格をそなえ
る三百年である。帝制とはなにか。「帝者の制は恢恢とし
てすべてを包容し、その大制は天下を制して分裂させるこ
となく、上は湛然たり、下は恬然たり。天下の危難は天下
とともにこれを安んじ、天下のあやまちは天下とともにこ
れを正す。千変万化しながら常に中を守り、卓然として不

動、感じて通ぜざるはないのである」(周公)。では、晋恵帝に筆をおこすのはなぜか。「後漢の殤帝いご帝制は絶えたにもかかわらず、なぜそこにはじまらないのか」。そのような辭取の質問に、王通はこうこたえている。

君子は帝制を一心一塗に待ちのぞみ、耳を傾けて聴き、目を拭って視るといふありさまであった。それで時間をかしかたえたのである。ところが桓帝、靈帝時代に帝制はついに亡んでしまった。魏の文帝、明帝時代には、魏制はいまだ完成をみなかったではないか。太康の初年に天下統一の事業がはたされ、帝制おこるべし、と君子たちは考えたが、それも振興をみずにおわった。そのため、永熙いごになると、君子たちは、なんとということだ、とあきらめてしまった。元経はかくしてやむにやまれずして制作されたのである。(問易)

「春秋作つて典誥の絶えたるごとく、元経興つて帝制は滅び」(問易)、「その帝たるや実は失なわれて名の存したるもの」(礼楽)にすぎず、「太熙の後、天子の存するところのものは号のみ」(立命)、となった。いっぽう開皇に筆を絶つて仁寿に及ばないのは、「仁寿大業のさいの事は言うに忍びない」(立命)からである。『元経』は春秋筆削の例

にならない、聖人の賞罰にかわつて、この「衰世」三百年の歴史に褒貶をくわえることを意図するものであった(王道・魏相)。それは、「王道にとつて軽重をはかる権衡、曲直をはかる繩墨」(事君)であり、常としての義と変としての権があわせ示されることによつて「皇極」が立てられるのである(魏相)。

ところで『元経』は、中国を支配する帝王、それは天命の帰するところなのであるが、その正朔のもとに紀年される(魏相)。すなわち『元経』は、「天命の正しく、帝位の明らけく、神器の帰するところを証する」書なのであり(魏相)、具体的には、西晋、東晋、宋、そして北魏、北周、隋の帝号をあげて、その正朔のもとに紀年されるのである。

元経はつまるところ帝名を正すものならんか。皇始の帝北魏武帝は天のあかしをえて真統を授かった。晋宋の諸王は正体に近く、それで中国を忘棄することはなかつたのである。これは穆公王通の高祖たる王虬の志でもあった。齊梁陳の徳は四夷にしりぞけて、中国の朝代が存在が太和北魏孝文帝の力であることをあきらかにした。(問易)

天から真統を授かった北魏道武帝は、三九六年にいたつ

て中国にはいり、皇始と改元した。しかるにしばらくの間、依然として晋の帝号が記されるのは、なお晋をいたみ、なつかしんでのことであり、天時人事の盛大となった北魏孝文帝にいたってはじめて北魏の帝号が記されるのである〔述史〕。ではまた、開皇九年の陳滅亡の条下に、「晋宋齊梁陳亡ブ」と書かれているのはなぜか。

江東には中国の伝統があり、衣冠礼楽のおもむくところであつた。永嘉いご江東の地位はたかまりながら、たかまりおおせなかつたのは、人物をかいたからである。齊梁陳においては、かくして君子は国の政治にあずからなかつた。だが滅亡してしまふと、君子はやはりなつかしんだ。それで、晋宋齊梁陳亡ブ、と書し、五朝をそろえてその国にことよせ、かつその国の滅亡をいっただのである。ああ。先生の礼楽を棄てたためにこの事態にたちいたつたのだ。……衣冠文物の伝統ある晋が先に亡びることを、君子は欲しない。また宋には晋をもちたてる功があり、中国恢復の志があり、やはり先に亡びることを欲しない。それで齊梁陳をそろえてその国にことよせたのである。亡ばないさきには、君子はその国からそばをむき、中国の礼楽はどこへいってしまったのか、といつたが、さて亡んでしまふと、やはりおれは中国の遺民だ、と

いっただものだ。〔述史〕

このような構成をもつ『元経』は、つまるところ、「南北の疑を断つこと」（礼楽）、いいかえれば南北兩朝のいずれの王朝を正統とするかの疑点をはらさんとするものであつた、といつてよい。そして王通は、晋、宋、魏、周、隋と王統が伝えられたとした。このきわめて特異な正統論の根拠は、知的把握の範圍をこえた天命に内在する、と王通は説明している（魏相）。しかし、王通の真意は他に存するのではないか。彼の真意を解く鍵は、王通の世系のなにかかくされているように思われる。

太原王氏の一派という王通の世系については、故守屋美都雄氏の『六朝門閥の一研究—太原王氏系譜考—』第六章第二節「文中子王通の家系」がそなわつているので、くわしくはそれにゆずりたい。要するに、王通の高祖である晋陽穆公王虬が、四七九年の宋齊革命のさいに、江南より北遷したのである。それはちやうど北魏孝文帝の時代にあつており、宋の亡国とともに北魏の帝号をあげる『元経』の構造は、この王虬の北遷になよりの根拠が存するのではないか。『元経』が元魏を帝とするのはなぜか、そう董常

からたずねられて、王通も不用意に本音をもらしてしまつたと思われる一条がある。「乱離ニ斯レ瘼^ヤメリ、吾レ誰ニカ適^キキ帰セン、天地ハ奉ズル有リ、生民ハ庇ウ有リと。これぞわが君である。しかも先王の国に住まい、先王の道を受けついでいる。われは先王の民なのだ。どうしてそんなことをたずねるのか」(述史)。

『中説』には、王虬の北遷と北魏孝文帝時代の文明の興隆とが、ふかい因果関係のもとに強調されていることを、だれしも容易に気づくであろう。

穆公が来たり、王肅が至って、元魏の教化はとげられた。

(述史)

孝文帝が没して宣武帝が立つと、穆公はなくなられ、関朗は退隠した。魏の不振はゆえあることであった。(関朗)

関朗、字は子明、は『中説』中にしばしばあらわれ、巻末の「文中子世家」にも、王通が彼に礼を問うたという、まったくアナクロニズムな記事がある。また「録関子明事」にも、王虬ならびに王虬の子王彦との交渉を主体としてくみたてられた関朗の事跡と、彼が聖人文中子の出現を予言したことどもがのべられているが、謎が多い。今日、北魏

関朗撰、唐趙蕤注と題する『関氏易伝』が伝わっている。しかしこれは、阮逸の制作にかかる偽書と認定されている。②しかも、『関子易伝』中の「卜百年義」と巻首におかれる趙蕤の「関朗伝」をつなぎあわせれば、「録関子明事」の一篇がほぼできあがる、という不思議に気づくのである。

いっぽう王肅は、四九三年、父の雍州刺史王奐が南斉の武帝から謀反罪にとわれるや、北魏に亡命し、孝文帝から厚遇された。陳寅恪氏の『隋唐制度淵源略論稿』において、南朝前期の文物典章が北魏に輸入され、さらにそれが北齊をへて隋唐に継承されるうえの関鍵をにぎる人物として強調されるのが、この王肅である。くわしくはそれについてみられたいが、とりわけ注目されるのはつぎの記録であろう。「晋氏の喪乱より礼楽は崩亡す。孝文は制度を釐革し、風俗を變更せんとすれども、その間朴略にしていまだ淳なる能わず。肅は旧事に明練し、心を虚しくして委を受け、朝儀国典は威な肅より出ず」(『北史』卷四二)。すなわち、北魏を礼楽のくにに改造するうえに多大の功績があったのであり、「王肅至って元魏達せり」とはただしい認識とすべきであるが、はたして王虬にも同様の功績があったかどうか

か。『魏書』『北史』いずれも王虬について片言隻句も言及しないため、はなはだ疑問としなければならぬ。むしろ、作為の所産、と認める方が、理にかなっているであろう。江南から北遷し、北魏を中国の礼楽のくにに改造した王爾は、宋から北魏に王統がうつったとする『元経』のかんがえにまことにうってつけの存在である。その王爾と王虬とを、時期的にもあい前後する北遷という事実の一致から密接にむすびつけた、のではあるまいか。

六

ふたたび論点をもとにもどそう。後世、王通の虚実あるいは『中説』の真贋がとわれるさい、きまってといつてよいほどとりあげられる問題は、王通の門人として『中説』に記されるもののなかに唐初の名臣が多数ふくまれていることであつた。関朗篇をみてみよう。そこには、王通の門人のうち、竇威、賈瓊、姚義は礼、温彦博、杜如晦、陳叔達は樂、杜淹、房喬支離、魏徵は書、李靖、薛方士、裴晞、王珪は詩、叔恬王通の弟王凝は元経、そして董常、仇璋、薛收、程元は六経すべてを授かつた、と記録されている。

これだけの巨人をならべられてみると、疑古派ならずとも首をかしげたくなるのが当然であろう。たとえば『郡齋讀書志』は、『中説』の解題においてつぎのよりのべている。

右書は王通の門人が共同してその師の言葉を集録したものである。通の行事については、史書に考える手がかりがない。ただ『隋唐通録』に、彼には穢行があつたので史臣に削られた、と称している。いま『中説』をながめてみると、彼の事跡は往往にして聖人を僭し、そのエピソードはまったく噴飯ものである。ひとり貞観時代の將軍宰相たちをとつても、たとえば房支離、杜如晦、李靖、魏徵、温大雅、温彦博、王珪、陳叔達など、すべてが彼の門人である。予はかつてこの点に疑念をいだいたが、李徳林、関朗、薛道衡の事を見るに及んで、そのすべてがでたらめであることが判明した。

そして、『四庫提要』にも引かれていた考証三条を展開したあと、「この三事から推せば、房杜たちを門人としていることも、およそ知るべきであろう」と結論している。しかしながら、陳叔達がたとい門人にはあらずとも、「その善誘に惑おひ、頗るその大方を識つた」と語ってい

るように、王通ときわめて緊密な交渉をもったであろうことは、すでに確認したところである。また、王績の「遊北山賦」には、董常はじめ数名が、はっきりと門人としてあげられていた。それらのうち、董常、程元、賈瓊、姚義四名のことは、『中説』のほかに知るべき材料がないが、薛収、温彦博、杜淹の三人は、いうまでもなく両『唐書』に立伝されている。確認をおこなおう。

薛収(五九二一六二四、旧卷七三・新卷九八)字は伯褒。蒲州(河東)汾陰の人。隋の内史侍郎薛道衡の実子であるが、従父薛孺のあとをついだ。父道衡が煬帝より自尽を賜わったので、隋朝に仕える意志をたつた。李淵拳兵の報がつたわると、首陽山に逃れてあい応じようとしたが、李淵軍に抵抗の姿勢をとった蒲州通守堯君素が、収の生母王氏を、おそらくは流謫地の且末から迎えて、蒲州城内にとどめたため、そのままふみとどまったという。蒲州城陥落後、唐軍に投降し、秦王府記室參軍房玄齡から李世民―唐太宗―に推薦された。彼の歴した秦王府主簿、天策府記室參軍の官職名が示すとおり、李世民的腹心として房杜とあいならぶ殊遇をうけたが、世民の即位をまたずして夭折した。さて

王績は、薛収の名を「遊北山賦」にあげるだけではない。「負苓者伝」はまたつぎのような内容である。白牛溪における文中子の講義がはてから、松下にいかう薛収が、伏羲氏の画した八卦に繫辞をつけた文王の繁を嘆じているところに、苓を負うものがあらわれた。そして、八卦が画される以前から、三才、四序、百物、万象は厳然として存在していたのであり、伏羲氏こそ乱を兆せるもの、と説くと、ふいと姿を消した、と。『東臯子集』を信ずるかぎり、彼が王通の門人であったことは否定しえないであろう。長安において王通と会見した薛道衡が門人となるようすすめたという天地篇の記事は、晁公武の考証のごとくたしかに信ずるにたりないが、しかしともに隋朝に仕えず、しかも龍門と汾陰という至近の距離に生活した二人のあいだに、接触のもたれたことは十分に予測されるところである。薛収の名は『中説』にくりかえしくりかえしあらわれ、門人中の地位は、董常、程元、仇章とならんできわめてたかい。さきに紹介した「隋故徵君文中子碣銘」にかたられる彼と王通との関係はつぎのごとくであった。「収は学んで殺に至らず、行いは異れたる能無きも、高き跡を絶塵に奉じ、深き契り

を終古に期し、義は師友を極くし、恩は親故を兼ね。世道の衰微にめぐり遇い、衣冠の板蕩せるときに属したれば、時に以て力を王事に肆くし、管管仲 樂毅 毅のごとく存りたしと思ひしかど、躬ら孔の壁を守りて自ら遊子遊 夏子夏に同じくすることを獲ず。このようにみてくると、『金石萃編』卷五一に収められた「薛收碑」、そこにも彼が王通の門人であったことは記されないのであるが、しかしそれに付された王昶の按語は、はなはだ妥当なものに思われる。

古来、聖賢の撰述は、おおむねその死後、門弟子の纂述によるものであって、自撰によるものではない。王通なる人物は当時たしかに存在したし、またその書もたしかに存在したのである。ただ門人が王福時たちと撰したため、記憶にふたしかな点があり、多くの矛盾が生じたまでである。道衡の妻の王氏は、通の姉か姉であるかも知れず、しかも同郷人なのだから、受業に出かけたことは当然に考えられる。もしはたして収が門人でもないのに門人とよんでいるのだとしたら、のちに元超（収の子）は侍郎となり、また文学の任にたずさわっているのだから、元超たちはその偽託に我慢できたであらう。

うか。収が通の門人であったことは疑問の余地がない。ただ収の事跡が多いため、碑の撰者はくたくたく述べなかつたまでであらう。

温彦博（五七四―六三七、旧卷六一・新卷九）字は大臨。太原（并州）祁の人。いわずと知れた貞観時代の名臣の一人。

隋の開皇末年に文林郎として内史省に直し、通直謁者に転じ、隋末乱離のさいに涿郡において幽州総管を自称した羅芸の司馬となった。羅芸の自立を、『通鑑』は大業十二年（六一六）にかける。彼が唐に投降したのは武徳二年（六一

九）十月であり、温彦博が唐の臣となったのもまたそのときである。兩『唐書』によって追跡しうる隋唐交替期の温彦博の行状は以上につきるが、それを補なうものとして、碑文が『金石萃編』卷四四に収められている。惜しむらくは断闕はなほだしきをきわめるけれども、そのなかから、

……大業之始以親喪去官孺慕之感哀毀之極与（闕一字）長（闕五一字）政出奔高麗既而乘轅南反詔公衡命蕃境申明臣節陳之以逆順（闕一字）暢（闕三字）之以（闕三〇字）之（闕一字）豈（闕一二字）擁節無功於月氏又以公為東北道招慰大使屬天地橫（闕四〇字）而（闕一字）天（闕九字）遷夏商之鼎艾綬銀章弓旌先

於髻後建社班瑞光龍屬於勳庸……

と拾いだしうる諸文字は、大業初年に父の喪に服すため官を去ったこと、高麗に出使したこと、またのちに東北道招慰大使となったこと、などをうかがわしめる。想像されるころでは、東北道招慰大使として出使したとき、羅芸の懇請によるか、あるいは脅迫によるかしてその司馬に就任したのではあるまいか。もし以上のごとくであるとすれば、温彦博が王通の門人でありえた時期は、父の喪に服した大業初年から高麗に出使した年の間にもとめられよう。ただ、『中説』にみられる二人の対話はわずか三条にとどまり、門人といってもどの程度のものであったか。あるいは陳叔達と王通との関係に似たものであったかも知れない。

杜淹（一六二八、旧巻六六・新巻九六）字は執礼。京兆杜陵の人。杜如晦の叔父である。素養かんばしからず、わかきころ友人の韋福嗣とあいはかって太白山に隠れ、名をあげようとした。しかし、隋文帝からえせ隠者たることを看破され、江南に謫戍された。彼が王通のところに来学したのは、のち罪を赦されて郷里に帰った、とあるときのことであろう。『中説』は、彼と王通とのあいだに隠について対話がか

わされたことを伝えている。

その身を伏せてあらわれないことをいうのではない。時の命運がはなはだしくもとるなら、その徳を隠すのである。有道者にしてはじめてなしうることであって、故に、退イテ密ニ蔵ス『易』繫辭伝上、というのである。

王通はそのようにこたえ、さらに言葉をついで、「仁ニ頭ワン用ニ蔵ス」『易』繫辭伝上とは中古の事であり、「その跡を滅しその心を閉ざし、神によって理解できても事によって求めることができない」のが、「蔵」の本義である、と説いている（関朗）。えせ隠者との隠についての対話は、はなはだ皮肉な対照をなす。さて杜淹は、やがて雍州司馬高孝基の推挽によって承奉郎に就任し、大業末には御史中丞となったが、王世充が洛陽に僭号すると（六一九年四月）、その吏部尚書としておおいに信任された。武徳四年（六二二）五月に王世充政権が崩壊してはじめて唐の臣となり、太宗時代には、御史大夫、ついで判吏部尚書として朝政に参預するにいたった。

これら薛収、温彦博、杜淹、それに陳叔達をくわえた四人のほか、さらにもう一人、『東臯子集』を通して、王通

と交渉をもつたらしく思われるのが、「貞観の将相」のなかでもとりわけ突出した魏徴である。証拠は、「答馮子華処士書」のなかにある。

乱は極まれば治まるもので、王道がしだいにひらけてきた。天災は流行せず、穀物は豊かにみのり、賢人は朝廷にあふれ、農夫は田野に満ちている。われら江海の士は、擊壤鼓腹して太平の税を納めるのみであつて、帝はわれにとつてなにの力があろうか、といった(堯の御世の老人の)心境である。また房李の諸賢は廟堂に力をつくされ、わが家の魏学士も手腕を發揮し、公卿がたはいそいそと礼楽につとめておられる。天子は明哲、股肱の臣はまことにすぐれ、これにすぎる慶びがまたとあるだろうか。

「房李諸賢」とは房玄齡と李靖であろう。「吾家魏学士」とは、さだめし魏徴のことでなければならぬ。そして、「吾家」という、きわめてちかしい関係にあるものをよぶのに使用される語が冠せられていることに、注目すべきである。ただ他聞にもれず、魏徴が王通の門人であつたことは、両『唐書』(旧卷七一・新卷九七)ともかたく沈黙を守るところである。と同時に、彼が王通とまったく没交渉であ

つたと断ずるには、隋唐交替期における魏徴の行跡は、あまりにもさだかでない。

両『唐書』が、彼の本質を魏州曲城、ないし鉅鹿曲城と記すのは、下曲陽とあらためるべきであろう。^④ わかくして孤貧、落拓として大志あり、生業につとめず、出家して道士となり、武陽郡丞元宝藏が拳兵して李密に応ずると、その書記をつかさどつた。元宝藏の拳兵は大業十三年(六一七)九月、すなわち王通の死におくれること四月であり、魏徴が王通と接触しえたのは、血気さかな波瀾重疊の青年期であつたことになる。『中説』によると、二人のあいはつぎのごとくであつた。

薛収が館陶に遊んだおり、たまたま魏徴とつれだつてもどつてきて、先生に報告した。「徴は顔回、冉閔の器です」。徴は先生のところ滞留して六経について語り、数月の間外出もしなかつた。さて辞去するに及んで、薛収にいった。「明王が出現せずして先生が生れられたのは、三才九疇のしごとが布衣に委託されたのだ」。(周公)

「宰相世系表」によると、魏徴五世の祖の珉は館陶に住まつたとあり、そこに魏氏の根拠がおかれたと推察される。

ともかく、魏徵と王通との接觸はごく短期間のことにすぎなかつたのであろう。『中説』の真偽がとわれるさい、『隋書』編纂の総裁官であつた魏徵が、王通の門人であつたと『中説』に記されながら、なぜ王通の伝を立てなかつたのか、このことがまた一つの争点となつてゐる。そのことについて、たとえば李靚は、「師ではなかつた」からであるといひ、言外に両者の交渉を一さい否定するごとくである(『直隲先生文集』卷二九、読文中子)。しかし、両者の師弟關係を否定するのは正しいと認めえても、まったく没交渉であつたと断ずるのははたして正しいであらうか。

かく、門人とよぶことが適當かどうかはともかくとして、唐初の名臣のなかに、かつて王通と交渉をもつたことのある人たちの存したことが、『東臯子集』を媒介として確認された。「遊北山賦」に、「惜しいかな吾が兄は、時の平らかならざるに遭う、身歿せし後、天下は文明たり、門人を廊廟に坐せしめ、夫子を佳域に瘞めたり」とうたわれるところの自注に、「皇家が受命するに及んで門人は多数、公輔の地位にのぼつた。しかし、文中子の道はまだ世に行なわれていない。北溪に遊んだおりに故迹を周覽したのは、

けだし高賢の不遇をいたんだのである」というのは、なにがしかの真実を伝えよう。そしてそれら唐初の公輔のなかで、王通および王氏の人たちとの關係がふかく、真に門人とよんでよさそうなのは、薛収である。『旧唐書』王勃伝に、王通が卒去するや、「門人薛収等は相いともに讒し、諛して文中子といった」と、門人の代表に彼の名をあげるのには、注目されてよい。彼は、唐の天策府記室參軍に榮達してからも、龍門を再訪して王績との旧交をあたたためてゐるし(『東臯子集』薛記室取過崔見尋率題古意以贈)、また楊炯の「王子安集序」には、門人薛収が『元経』の伝を執筆したこと、しかし未完のままにのこされたため、王通の孫の王勃が、「薛氏の遺伝を続けた」こと、を伝えているのである。

七

王通の死とそれに連続する李淵の龍門進軍は、「文中子学団」におおきな動搖をあたえたにちがいない。学問集團としての純粹性を維持してゆくべきか。それとも李淵軍に積極的に参加すべきか。指導者を失つたばかりの学団員の意見は、当然に分裂したであらう。そしてけっきょく、学

団は自然に解散へとおいこまれたのであろう。やがて唐朝が樹立されると、かつて学園に関係のあった人たちのあいだから、榮達をきわめるものも出現した。王氏の人たちは、彼らが王通を顕彰してくれるものと、おそらくは期待した。彼らの最大のねがいは、魏徵を総裁官として編集がすすめられている『隋書』に、王通が立伝されることであつたらう。だが彼らは、薛収を例外として、意外に冷淡であつた。たとえ王氏の人たちが王通の門人であると認めたにしても、王通との接触があさかつたために、門人とよばれることをかえって迷惑に思う人たちもなかつたであらう。

しかし、王氏の人たちの胸底には、彼らにたいする不満がおりのごとく沈澱していったのではないか。王績が陳叔達にあたえた書簡（先掲）にみられる、一種毒をふくんだ表現は、それを思わせる。

かくして王氏の人たちのあいだには、王通の道いまだ行なわれず、王通は依然として不遇である、それは王通の道があまりに偉大すぎるからだ、そのような意識がしだいに昂揚し、あわせてみずからの手で王通を顕彰せんとするところみが開始されたのではないか。「答程道士書」のな

かで、王績は、自分が分になつた自適の生活をこそ楽しむものであることを強調してのべたあとに、こういつている。

先年わが家の三兄王通は、名声ずばぬけてたかく、まず一の徳に身をやすんぜられ、つづいて六経の義を闡明された。ほくはいつもその遺文を愛好し、治策の要はほぼそこにつくされていると考えている。しかるに、嶧陽の桐でつくられた名琴、鳥号の名弓は、知音の伯牙、強弓の養由基をまっけてはじめて価値が発見されるように、いやしくもしかるべき人材が得られないときには、道は虚しくは行なわれないのである。

この書簡が、唐朝への出仕の勸請をはねつけたものであることは、行間から容易によみとることができるといふ。「去れよ程生、わが徒にあらざ、足下のごときは身は江湖の上に出るも心は魏闕の下に遊ぶものというべし」とときめつけているのは、そのなによりの証拠である。いつごろに書かれた書簡なのか、また程道士とよばれるのがだれなのか、はなはだ明瞭をかくが、しかし王通の道の偉大さをたたえると同時に、その道が行なわれえないのは、王朝の要路者が「その人にあらざる」ためであり、そのような王朝に仕える意志なきを宣言した書簡であること、このことは疑問

の余地がない。

王氏の人たちによる王通の顕彰、それはほかならぬ『中説』編纂の事業に具体化された。『中説』の成立については、従来実さまざまの説がなされてきた。しかし、編纂の功をだれか特定の個人に帰するには、どの説も決定的なきめてをかいており、けっきょく、唐初において王氏の人たちを中心に編纂された、とするのがもっとも無難であろう。その点では、どの説もほぼ一致した見解に達しているのである。この段階で、王通を聖人の地位にちかづけるべき補強工作がくわえられたであろう。そしてさらに数世紀をへて、一その手がくわえられたらしい。手をくわえたのは阮逸であった。「程伊川は、文中子にはいくらかの格言がありながら、後人の附加によって駄目にされてしまった、といっている。みたところ、きつと阮逸諸公が増益張大し、さらに顕著なものを借りきたってうねりをしたのだ」(『朱子語類』卷三七、戦国漢唐諸學)。今日では失なわれてしまっているが、宋代には、阮逸本のほかに龔鼎臣本が存在していた。龔鼎臣が齊州李冠の家で得た唐本である。阮逸本が十篇に分け、また各篇冒頭の二字をとって篇名とし、

また序篇をそなえるのにたいして、そちらはただ甲乙をもつて篇に冠し、分篇の始末がことなるだけでなく、本文にも往々にして阮逸本との異同がみられたという。今日の『中説』テキストに、阮逸の手がくわわっていることを示唆する一つの証拠であろう。さきのにべた関朗にかんする記事のごときは、とりわけそうであろう。偽書マニアの阮逸には、きわめてありそうなことである。しかし、『中説』すべてが阮逸の偽作にかかるといふ説は、もちろん成立しない。

八

王通の虚実、ないしは『中説』の真贋をめぐる問題は、もはやこのあたりでうちきるのが適當であろう。ふたたび朱子の言葉をかりて、稿を結ぶことにしたい。

『中説』の一書はもとより後人の仮託であつて王通の自著ではないが、しかし要するに王通が平素から法螺ふきで、『統詩』や『統書』など紛紛と述作したため、後人仮託の罪をまねいたのである。後世の子孫は、彼が周公孔子にならなからなければ、みんなが冷淡なのをみ、そこでまたまた一世の公卿大夫の顕著なものをつかまえ、纂集附会してし

あげたのである。要するに王通にそのような下心があったのだ。彼の罪ではないにしても、やはり彼にその端緒があったのである。

『中説』の一書は、子弟が彼の言行を記録したものであるが、しかしたいへん見どころがある。その書が後人の仮託だといつても、そんなにたくさんを仮託できるはずはない。かかるタイプの人間が実在してこそ、はじめて修飾して仮託もできるといふものだ。でっちあげでこんな人間を造形したのなら、造形した人にもたいした見識があることになる。凡人ではない。(『朱子語類』同上)

つまり、『中説』のなかの王通像の造形がすべて後人の放恣な作為の所産であるのではなく、そこには王通の実像がいろいろ反映されている、というのである。王績の諸作品を通して検証された王通の人間関係から考えても、『中説』に少なからぬ真実がふくまれていることはたしかであろう。

ところで王通は、時代の推移にともない、よきにつけあしきにつけ、さまざまの角度から論評されることになった。彼を評価する人たちは、彼の思想のいかなる側面を重視したのか。それはいかなる時代思潮と照応関係をもつものな

のか。そして、それら正負両面の論評を勘案したうえ、けつきよく王通をどのように中国思想史上に位置づければよいか。これらより喫緊の問題がのこされたわけであるが、機会をあらためて説きたいと考えている。

① 『邵氏聞見後録』卷一八、「曾仲成云、歐陽公有韓孟子文詞、兩雄力相當、孟窮苦齟齬、韓富浩穰穰、郊死不為島、聖齋免其戚等句、聖齋謂蘇子美曰、永叔自要作韓退之、強差我作孟郊。」

② たとえば天地篇に、「或曰、董常何人也、子曰、其動也權、其靜也至、其顔氏之流乎」といっている。

③ たとえば天地篇に、姚襄、李靖、竇威、薛收、賈瓊、杜淹、房玄齡、魏徵、溫大雅、陳叔達をそれぞれに論評し、彼らが「若逢其時、不減卿相」といっている。

④ 『玉海』卷五三に、「宋咸撰過文中子十卷、又駁中説二十二事」とあるが、いまその文章がなにに収められるのかを検しえない。『焦氏筆乘』卷二文中子にもつぎのようにいっている。「宋咸作駁中説、謂文中子乃後人所假託、實無其人、則幾於訾說矣、王績有負荅者伝、陳叔達有荅王績書、曰、賢兒文中子恐後之筆削、陷於繁碑、宏綱正典、暗而不宣、乃興元經、以定正統、陸龜蒙送豆腐處士序亦曰、昔文中子生於隋代、知聖人之道不行、歸河汾間、修先君之業、後司空函皮日休、俱有文中子碑、五子皆唐人、言之鑿鑿如此、威獨臆斷、其無可乎。」

⑤ 『容齋統筆』卷一文中子門人、「或者疑為阮逸所作、如所謂薛收元經伝亦非也。かならずしも阮逸の偽作と断定する口ぶりではない。

⑥ 李播は李淳風の父。隋の高唐県尉であったが、のち傅奕とともに道士となった。傅奕は唐初の排仏家として著名である。兩『唐書』李淳風伝および『広弘明集』卷六を参照。陳永のことは不明。

- ⑦ 『書東臯子伝後』。
- ⑧ これと同題のパロディーが、蘇東坡によって書かれている。
- ⑨ 『汝忘天下乎』にたいして、阮逸は「言未能忘天下」と注している。つまり兼忘、坐忘の方向に解釈し、「忘天下」に価値を認めるのであるが、すくなくともここは当然であらう。
- ⑩ 拙稿「沈約の思想―六朝の傷痕―」(『中国中世史研究』)参照。
- ⑪ 『旧唐書』陳叔達伝によると彼の侍中就任は武徳四年(六二二)である。
- ⑫ 『新唐書』王績伝では、家兄を王通のこととしている。
- ⑬ 『中説』魏相篇に、「子謂北山黃公善醫、先寢食而後鍼藥、汾陰侯生善筮、先人事而後說卦」とある。
- ⑭ この門人の数は驚くほどのものではない。『隋書』儒林伝をみれば、たとえば包攪の場合、「著録者數千人」といい、馬光の場合、「初教授瀛博間、門徒千數」という。
- ⑮ 布目潮風『隋唐史研究』の第三章「李淵の起義」を参照。
- ⑯ 『唐文粹』巻八二に収める王績の「身陳叔達重借隋紀書」、および陳叔達の「答王績書」。ただしどういうわけか『東臯子集』には収められない。(俗南閣叢書本は補遺の部分に収録)。
- ⑰ 『史通』古今正史篇に、「隋史、當開皇仁壽時、王劭為書八十卷、以類相從、定其篇目、至於編年紀伝、並闕其体、煬帝世、唯有王胄等所修大業起居注、及江都之禍、仍多散逸」とある。されば、ざわめて稀覯に属する書であらう。
- ⑱ 原文は、「蓋獲麟之事、夫何足以知之」とある。『中説』述史篇に、「文中子曰、春秋其以天道終乎、故止於獲麟、元経其以人事終乎、故止於陳亡、於是乎天人備矣」とあるのが、参考となるだろう。
- ⑲ 『統書』のことは、先掲の平岡教授の論著にくわしい。
- ⑳ 劉裕が桓玄政權を打倒したこと、および南燕、後秦を征服したこと、をよす。
- ㉑ 『四庫提要』巻七経部易類存目を参照。なお『提要』は引かぬが、『朱子語類』巻一三七戦國漢唐諸子にも、「今之偽書甚多、如鎮江府印関子明易、并麻衣道者易、皆是偽書」といっている。
- ㉒ 「文中子世家」にみえる王氏の世系が、どこまで真実をつたえるものか、疑えばまだいくらでも疑うことができる。たとえば王胤の父王焮と王爾の父王奕との類似は、たんに偶然的悪戯であろうか。呂才の『東臯子集序』の冒頭に、「君姓王氏、諱竊、太原祁人也。高祖普穆公自南帰北、始家河汾焉、歷宋魏迄于周隋、六世冠冕、国史家牒詳焉」といっているが、王氏の祖は一人として正史中にみえない。南來の家であるため、もし家牒を偽作せんとすれば、かえって容易であらう。
- ㉓ 弘文館学士となったことをさしているであらう。
- ㉔ 『四庫提要』も引くところであったが、『資治通鑑』巻一の「文中子門人」には、薛収が王通の門人であったことをいぶかっている。その根拠は、「文中子世家」に、「江都難作、子有疾、召薛収謂曰、吾夢顔回、称孔子帰休之命、乃寢疾而終」とあることである。しかしながら、この記事の表現が適切でないことは、先述のとおりである。したがって立論の根拠とはならない。
- ㉕ 按ずるに政の一字は斛斯政ならん。『八瓊室金石補正』巻三〇に、「葬編」のものとの出入異同をともしつつ収められる碑文には、「煬帝親董九伐間罪三韓于時礼部尚書楊元感(闕四字)兵部侍郎斛斯政……」とみえる。楊文感と通謀した斛斯政が高句麗に出奔したのは、第二次高句麗遠征のさなか、大業九年(六一三)であった。
- ㉖ 趙武沢注『魏徴』(歴代政治家人物伝記注)参照。
- ㉗ 王通が『隋書』に立伝されなかったことについては、『中説』巻末の「東臯子答陳尚書書」ではつぎのようにいう。王績は『隋史』執筆中の陳叔達に、王通伝の材料として「文中子世家」を手交した。ところがたまたま監察御史王凝が侯君集を弾劾し、事件が太尉長孫無忌に波及

したため、長孫無忌の怒りにふれ、王氏兄弟はみな抑えられた。杜淹、魏徵たちは、王氏一家のために和解の勞をとってくれたが奏功せず、陳叔達もついに長孫無忌の權をおそれて王通伝を書かなかつた。と。陳叔達の『隋史』がいかなるものか、それが魏徵を総裁官として編纂された、いわゆる五代紀伝の一としての『隋書』といかなる關係にたつのか、いさゝ不明であるが、長孫無忌との関連を、李觀は主觀的判断によつて、また洪邁は客觀的判断によつて、それぞれつぎのように否定している。

隋書魏公所述、常人或得一伝、而無王通云者、豈窮為弟子而無忌若是乎、或謂以長孫無忌怒故、夫魏公引義諫諍、不為天子屈、豈憚一無忌而削其師說……(『直講李先生文集』卷二九、說文中子。司馬光「文中子補伝」の意見もほぼ同じ)。

今中説之後、載文中次子福時所録云、杜淹為御史大夫、与長孫太尉有隙、予按淹以正觀二年卒、後二十一年、高宗即位、長孫無忌始拜太尉、其不合於史如此(『容齋統筆』卷一、文中子門人)。王通が立伝されなかつたのは、要するに、魏徵が彼を師とよぶほど深い交渉があつたわけではなく、またなにより、王通が当時それほどの大儒と認められていなかったためであらう。

② 臆説すれば、隋唐革命のさいに活躍した王暹知の入室の弟子に潘師正と徐道邈があつたといわれるが、その徐道邈であるかも知れぬ。『雲笈七籤』卷五參照。

③ ここは王績についてかたる場ではないので、くわしくはのべないが、一見飄逸にみえる王績の隠逸は、実は深い憂愁をたたえるものであつたのではなかつたか。すくなくとも、わがき日の彼が、はなはだ有為の青年であつたことは、「晩年叙志示崔处士」の詩に示されている。隋末においては未曾有の乱世に生きる憂愁を、唐初においては一門の不遇を、酒に託して頼みさせたのではなかつたか。韓愈がつぎのよう

に王績を評するのは卓抜である。「吾少時読解縣記、私怪隱居者無所累於世、而猶有是言、豈誠旨於味邪、及讀阮籍陶潛詩、乃知彼雖假蹇不欲与世接、然猶未能平其心、或為物是非相感発、於是有所託而逃焉者也」(送王秀才序)。

④ すでに紹介したごとく、「四庫提要」は、「所謂中説者、其子福時福暉等纂述遺言、虛相虛飾」と考えている。そのほか、たとえば司馬光の「文中子補伝」は、

中説亦出於其家、雖云門人辭取魏公所記、然余觀其書、竊疑唐室既興、淵与福剛輩、依並時事、從而附益之也(中説の原型が薛収と姚萇になるとするのは、中説テクストの卷末に附された「王氏家書雜録」の説に從つたのである)。

白璠の「湛淵潛語」卷一は、文中子中説、杜淹所撰、中間多有疎謬處、所以啓或者之疑議、然王氏子弟、如王凝福暉、不無傳會於其間、以張侈其門戶、益正娶の『癸巳存稿』卷一四「法言文中子」は

文中子王通、必有其人、作者蓋王凝父子、夸誇可憐人也、章炳麟の『檢論』卷四「秦唐」は、

尺唐一代學士、皆承王勃之化也、……中説時有善言、其長季詐則甚矣、……諸此詐欺之文、世或以為福郊福暉增之、空通弟續、既以通比仲尼(如汾亭操比龜山、白牛溪比尼丘泗溪之類)、子姓襲其唐虛、宜然、然其年世尚近、不可顛倒、而勃去通稍遠矣、生既不識季房杜陳之疇、比長故老漸凋、得以妄述其事、唐書稱通啓起漢魏尺晉作書百二十篇、統古尚書、有錄無書者十篇、勃補完缺遺、定著二十五篇、由今驗之、中説与文中子世家、皆勃所編造也。と考えている。

⑤ 『陳龍川集』卷十四「類次文中子引」。平岡教授前掲書八六ページ以下を参照。(京都大学教養部助教)

the symmetry of total negation or total affirmation. Contemporaneously, *Motoyuki Takabatake* 高島素之 who had the idea that the Bolshevik party, which won the Russian Revolution, was an overcomer of both “political movement and economic movement,” commented the direct-actionists, the main current of socialists, after the above model, and tried overcoming the ten years’ discussion. *M. Takabatake*, who thought that the necessity of enlargement of the huge Soviet State should be that of realization for the collective economy in Marxism, affirmed state socialism as a logical development of Marxism after the model of the Russian Revolution and therefore he has been considered as a convert to the rightist reaction. We should rank him in due position of one of the highest theorists in the *Taisho* 大正 socialism along with *Hitoshi Yamakawa* 山川均, both of whom tried to face and meet the inevitable problem of the *Taisho* socialism.

About *Wên-chung-tzu* 文中子

—especially *Tung-kao-tzu* 東臯子 as a clue—

by

Tadao Yoshikawa

About “*Chung-shuo*” 中說 by *Wên-chung-tzu Wang-t’ung* 文中子王通 imitated after “*Lun-yü*” 論語, there have been various comments around its credibility. This article, using as a clue “*Tung-kao-tzu-chi*” 東臯子集, the work by *Wang-chi* 王績, explains the credibility of *Wang-t’ung*’s figure, and tries to decide upon the authenticity of “*Chung-shuo*”. One and the biggest reason for the doubtfulness of “*Chung-shuo*” is that many illustrious retainers at the beginning of *T’ang* 唐 appeared as followers of *Wang-t’ung* in “*Chung-shuo*”.

Though we cannot call them followers, such as *Ch’ên-shu-ta* 陳叔達, *Wên-yen-po* 溫彥博, *Tu-yen* 杜淹 and *Wei-chêng* 魏徵, they presumably had some relation with the *Wên-chung-tzu* 文中子 clique. Though we cannot deny some pretext by the posterity should be found in “*Chung-shuo*”. We may think that the image of *Wang-t’ung* in “*Chung-shuo*” should not be a quite unprincipled and artificial product but a reflection without a little truth.